

（様式6-A）A. 雑誌発表論文による学位申請の場合

小林 未央 氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題 目 Serum leucine-rich  $\alpha$ -2 glycoprotein as a possible marker for inflammatory status in endometriosis

（子宮内膜症における炎症状態マーカーとしての血清ロイシンリッチ $\alpha$ -2グリコプロテイン）

Reproductive medicine and biology 21(1): e12536, 2023

Mio Kobayashi, Orié Nakamura, Yoshikazu Kitahara, Naoki Inoue, Yumiko Tsukui,

Yuko Hasegawa, Hikaru Hiraishi, Atsushi Yabuki, Ayako Muraoka, Satoko Osuka, Akira Iwase

論文の要旨及び判定理由

子宮内膜症は生殖年齢女性の約10%が罹患する頻度の高い疾患であるが、初期病変である腹膜病変の検出が難しいことから、診断の遅れが問題となっている。診断の遅れを解決するため、血清マーカーによる補助診断の確立が求められているが、現在、子宮内膜症の診断に有用な血清マーカーは存在していない。小林氏は、炎症性腸疾患等の病勢評価に用いられ、炎症性疾患との関連が指摘されている糖タンパクであるロイシンリッチ $\alpha$ -2グリコプロテイン（LRG）に着目し、LRGが子宮内膜症のバイオマーカーとなりうるかどうか、後方視的検討により検証した。その結果、血清LRGが子宮内膜症症例で上昇すること、子宮内膜症術後に低下傾向を示すこと、ジェノゲストによる薬物療法を行うことにより血清LRGが低下することが明らかになり、血清LRGが子宮内膜症のバイオマーカーとなりうる可能性があることが示された。

本論文は、日常臨床の疑問を端緒にした研究であり、今後も臨床と密接に関連した研究展開が期待できる内容である。論文の構成、仮説設定、解析手法、解釈と結論はいずれも妥当であり、生命倫理的手続き等も適切に行われていると判断された。審査委員からは、早期診断マーカーとしての応用へ向けての検討課題、測定値の解釈（術後にLRGが上昇した症例について）、ジェノゲストの臨床における使用方法等の質問がなされ、いずれも正確な背景知識と将来展望を回答することができた。以上より小林氏は、本論文に関連する研究を通して研究者としての十分な研鑽を積み、今後は独自に研究を遂行していく能力を有していると認められ、博士（医学）の学位に値するものと判定した。

（審査 2023年12月20日）

審査委員

主査 群馬大学教授（医学系研究科）  
泌尿器科学分野担任 鈴木 和浩 印

副査 群馬大学教授（医学系研究科）  
消化器・肝臓内科学分野担任 浦岡 俊夫 印

副査 群馬大学教授（医学系研究科）  
分子細胞生物学分野担任 秦 健一郎 印